

南宋王の神話

氏 岡 真 士

明の長篇小説に『南宋志伝』と呼ばれるものがある。この題名は、内容からすれば些か奇妙であろう。というのも、作品の時代設定は五代の後唐ごろから北宋の初期、つまり十世紀であって、けして南宋時代（一一二七—一二七九）ではないからである。

この問題について、最近では通説が固まりつつあるように見受けられる。だが私見によれば、大きく二つの理由から、その考え方は成り立ちにくい。本稿では、この問題に再検討を加え、筆者なりの解答を示したい。

一 『南宋志伝』について

『南宋志伝』のテキストについて詳しくは第五・六節で述べる。いずれにせよ『三国演義』や『水滸伝』・『西遊記』などとは違って、少なくとも明代の版本を使う限り、細かな字句の異同はあっても内容には大差が無い。論述は当面、影印本が普及している内閣文庫蔵の世徳堂刊本、『新刊画像補訂参采史鑑南宋志伝通俗演義題評』によって進めよう。このテキストは全十巻から成り、各巻五回の計五十回に分けている。

さて作品の時代設定は十世紀だと述べた。この点をもう少し詳しく説明すると、物語は石敬瑭の少年時代から始まる。石敬瑭とは五代後晋（九三六—九四七）の高祖であり、生年は『旧五代史』の本

紀などによれば景福元年（八九二）だが、『南宋志伝』ではこれに触れない。巻之一は冒頭で、五代後唐の天成元年（九二六）から清泰三年（九三六）まで十一年間の事を述べる、としている。また第一回は実質的に石敬瑭が十歳のときから始まっている。だから作品は十世紀に始まると考えて良い。

以下、時の流れに沿って叙述は進む。そして巻之十は北宋の建隆元年（九六〇）から開宝八年（九七五）まで、首尾凡そ六年の事実に述べる。と称するが、六年ではなくて十六年の誤記である。それはさておき、第五十回は南唐（厳密には『江南』と呼ぶべきだが）の降伏と柴宗訓（五代後周の恭帝。作品では『周後主』）の死で終わる。作品ではいずれも開宝八年十一月の事と読めるが、うち柴宗訓の死は、『旧五代史』の本紀などによれば開宝六年（九七三）春（三月）のことである。柴宗訓の死を最後に持ってきたのは、五代の終焉を強調したいからであろうか。いずれにせよ結末も十世紀のことである。

では、なぜ題名に『南宋』とあるのか。これについて諸説を整理したのが馬力『南北宋志伝』と楊家将小説（『文史』第十二輯、一九八一年）である。そこではまず、孫楷第・余嘉錫・鄭騫・柳存仁諸氏の説を紹介している。鄭騫の説は、内容が『宋の本土及び其の南方』に関わるから『南宋志伝』と名付けられた、というものであり、他の三者の説は、後人が内容を顧みず名付けたとする点で一

致している。孫楷第は原題を「宋伝」、余嘉錫は「五代志伝」と考
え、柳存仁は特に説が無い。しかし馬力論文はこれらを「推測」と
一蹴し、イデマの説に軍配を上げている。

イデマの説を紹介する前に、「南宋志伝」の内容や関連事項につ
いて、もう少し説明しておこう。

「南宋志伝」で大きな比重を占める人物は、五代の乱世を統一し
北宋王朝の礎を築いた趙匡胤（宋太祖）である。第一回は天成二年
（九二七）の誕生を記し、第十三回から第二十二回までは史書に見
えない若き日の武勇伝を描き、第二十八回以降は宋の皇帝に成り上
がり活躍するまでを虚実取り混ぜて綴っている。

「南宋志伝」は主に二つの素材を利用して成立したと考えられる。
一つは現存する「五代史平話」であり、もう一つは既に失われた
「趙太祖飛龍記」平話である。

趙匡胤を扱った長篇小説としては、他に清の「飛龍全伝」も重要
である。こうした虚構の世界では、趙匡胤は五代後周の世宗の義弟
であり、また鄭恩という架空の豪傑の義兄と設定されている。

二 「南宋王」説

さてイデマが着目するのは、「飛龍全伝」第五十二回に見える、
趙匡胤が「南宋王」に封じられたという記述である。これは、いわ
ゆる楊家将との戦いが終わったあとの話で、これまでの活躍をねぎ
らうべく、世宗は

遂に都虞候趙匡胤を以て爵を進め封じて南宋王と為し、鄭恩を
封じて汝南王と為し、

また他の將軍たちも相應の地位につけたと言う。

この記述を踏まえて、イデマは以下のように論じる。

吳瑤の「飛龍伝」全六十回（十八世紀）は、「南宋志伝」では
なくて、他のテキストに基づく。それは我々が仮定した平話
「趙太祖飛龍記」と同じか、またはその後代のテキストであ
ろう。「飛龍伝」（第五十二回）で郭榮「周世宗」は趙匡胤を南
宋王に封じた。この地位は趙匡胤を非常に突出させ、取り巻
きたちが彼を玉座につけようと企てる結果を生んだ。一方で、趙
匡胤は郭榮の義兄弟であり、郭榮は自分の死に臨んで息子を趙
匡胤に託したのである。すると失われた平話に描かれていた主
たる矛盾は、南宋王という趙の地位がもたらす必然的なもので
あったろう。すなわち彼を皇帝にする自身の力（「徳」）と、
郭榮の息子である幼帝への庇護を求める義兄弟の紐帯との矛盾
である。この矛盾が如何に解決されたかは、皆さんご存じであ
らう。

裏付けとして、李世民（唐太宗）を描く明の作品が引き合いに出さ
れる。

さてこうした矛盾は、「大唐秦王詞話」の構造に与えられた矛
盾と際立った類似性を示す。そこでは皇帝となる徳を有した李
世民が、兄弟を立てて、自分は秦王の地位に甘んじるのである。
この場合の矛盾は、徳がもたらすものと孝行や兄弟愛、家族が
要求するものとの間にある。次々と起こる事件の結果、李世民
は兄弟を殺さざるを得ない。倫理的矛盾はこちらの方がより切
実である。作品が地位（秦王）を表題に取り入れるのは適切で
あり、それによってこの矛盾は端的に表されている。二作品の
相似は、南宋という題名がこの小説に如何にふさわしいかを説
明している。

この『南宋王』説に、馬力論文は賛意を示した上で、さらに
もともと『南宋志伝』はおそらく『南宋王趙匡胤出身志伝』の
類の名前で、扉には略して『南宋志伝』と書いたのを、後の人
が版を重ねるとき深く考えずにそのまま書名として今日に至っ
たのだろう。

と推測して、清の『説唐後伝』が『後唐全伝』と題された例を傍証
としている。なるほど『説唐後伝』の時代設定は八世紀唐代だから、
五代後唐(十世紀)を指すかのような『後唐全伝』という題はそぐ
わず、これも不注意に由来すると思われる。

その後『南宋王』説は、通説となりつつあるように見受けられる。
たとえばつい最近、上田望「講史小説と歴史書(2)」(『東洋文化研究
所紀要』第百三十七冊、一九九九年)が世に出たが、そこでは『南
宋志伝』の書名問題について孫権第と馬力の説を紹介し、現時点
では馬氏の解釈が最も妥当と思われる⁽³⁾としている。

また時間的には前後するが、石麟「有関『南宋志伝』書名問題的
一点線索」(『文学遺産』一九九三年第二期)も『飛龍全伝』第五十
二回の南宋王のくだりに着目している。そして『飛龍全伝』が序で
『飛龍伝』の改作だと称することや、『南宋志伝』を『南宋飛龍伝』
と題する場合があることも合わせ、『南宋』が南宋王である可能性
を指摘する。ただし四百字足らずの短文であり、イデマや馬力の説
にも言及が無い。

三 南宋王の用例(1)

『南宋王』説のポイントは、趙匡胤が南宋王に封ぜられたという
点にある。まず確認しておきたいが、これは史実ではない。彼の即

位には有名な逸話がある。すなわち、世宗は「点検が天子と作
(な)る」と記された木簡を得て、殿前都点検の職を張永徳から趙
匡胤に交代させた。ところが間もなく世宗は亡くなり、幼い恭帝が
即位したものの、軍隊は趙匡胤を天子にまつりあげた、というもの
である(『宋史』卷一「太祖本紀」一)。殿前都点検は禁軍の最精銳
部隊を統率し、張永徳は周太祖郭威の娘婿だから、世宗は恭帝の身
を案じて人事異動を行なったのに、結局は予言が当たってしまった
ことになる。この逸話からもわかるように、趙匡胤は王になっ
ていなかった。当時の王は天子の息子たちに限られ、その中にも南
宋王はいない(『五代會要』卷二「諸王」)。

宋という国号は、趙匡胤が即位当時に帰徳軍の節度使であり、帰
徳の地は春秋時代の宋(今の河南省商丘市)に当たるから名付けら
れたものであろう。つまり即位してから初めて、宋の名が表に出て
きたわけである。まして南をつける必然性は無い。ちなみに五代後
唐の関帝や後晋の石敬瑁(石敬瑭の兄で早く亡くなった)は宋王の
肩書きを得ているが、趙匡胤とは関係が無い。

では虚構の世界において、趙匡胤が南宋王だったという話がある
のだろうか。『南宋志伝』に先行するのは雑劇であろう。具体的に
は、羅貫中『宋太祖龍虎風雲会』(脈望館校本)・馬致遠『西華山陳
搏高臥』(『元曲選』本)・無名氏『趙匡胤打董達』(脈望館抄本)・
無名氏『穆陵関上打韓通』(脈望館抄本)などで趙匡胤が活躍する。
けれども彼が南宋王になったとか、なるとかいう記述は見えない。
また『南宋志伝』と前後して、短篇小説「趙太祖千里送京娘」(『警
世通言』)や李玉『風雲会』伝奇(パリ国立図書館蔵抄本)が生ま
れた。そこにも南宋王の話は出てこない。逆に殿前都点検の職に関
しては、『西華山陳搏高臥』以外は何らかの形で言及されている。

そもそも肝心の「南宋志伝」にも、南宋王の語は見当らない。これは奇妙である。内容と関係のない題名を付けるものであろうか。

それについてイデマの説明はこうであった。「飛龍全伝」が基ついたのは「南宋志伝」ではなくて、「趙太祖飛龍記」平話か、その後代のテキストであろうと。つまり「南宋志伝」も「趙太祖飛龍記」平話を利用してはいるが、南宋王については削ってしまった、だから「南宋志伝」に南宋王の語は出て来ないと言っているのである。

しかし「飛龍全伝」の段階でそういうテキストがあったとしても、「飛龍全伝」が忠実にその痕跡を留めていると考えられるだろうか。詳しく検討してみよう。

「飛龍全伝」は第五十二回で趙匡胤を南宋王に封じていた。そして第五十八回で、南唐から長江以北を奪った世宗は、

南宋王は乃ち閑職なり、久しく居る可からず

として趙匡胤に定国節度使と殿前都指揮使の職を授けるのである。南宋王の語が出てくるのは、この七回の間に限られる。

実はこの「飛龍全伝」の七回の描写は、基本的に「南宋志伝」に由来することが、イデマの断定にもかかわらず、字句の類似から推定される。しかも味わうに足るのは、そのような部分で「飛龍全伝」が南宋王の語をわざわざ用いていることである。まず

世宗得奏、下詔与群臣商議。衆臣謂「王景伐蜀無功、空費錢糧、疑乎無益、不如罷兵、再図後挙」世宗猶予不決。南宋王趙匡胤奏道「近聞王景屢勝蜀兵……」

(「飛龍全伝」第五十四回)

世宗得奏、下詔与群臣議之。群臣皆謂「王景等伐蜀無功、糧運不繼、固請罷兵」世宗猶予不決。趙匡胤奏道「王景已勝蜀兵……」

と加えており、次に

世宗下旨「以破滁州、実出南宋王之功、尽将庫中之物賞賜匡胤」竇儀奏道……。

(「南宋志伝」第三十六回)

世宗曰「今下滁州之功、実出趙匡胤也、朕将此庫物賞之、可乎」儀曰……。

(「飛龍全伝」第五十七回)

(「南宋志伝」第三十九回)

と言いかえており、最後に

且說世宗一日昇殿、受百官朝賀畢、宣南宋王趙匡胤上殿……世宗道「御弟勿謙。南宋王乃閑職、不可久居、今加授為定国節度使、兼殿前都指揮使」

(「飛龍全伝」第五十八回)

翌日世宗御寶殿、受百官朝賀畢、宣趙匡胤上殿……世宗曰「卿勿謙言」即日授匡胤為定国節度使、兼殿前都指揮使。

(「南宋志伝」第四十回)

とやはり加えている。

特に興味深いのは、第一例と第三例については「南宋志伝」の記述が、さらに「五代史平話」にまで遡ることである。すなわち

宰相謂「王景等伐蜀無功、糧運不繼、固請罷兵」世宗命趙太祖往視之……世宗念趙太祖揚州・六合勝捷、宣授定国節度使、兼殿前都指揮使。

(「周史平話」卷下)

が、その原型である。ちなみに「飛龍全伝」の記述の一部は、このように「五代史平話」と、更にはそれが基ついた史書にまで遡る。

こうした例は、「飛龍全伝」が「南宋王」の語を加えたのであり、「南宋志伝」が「南宋王」の語を削ったのではないことを、端的に

示していると言えよう。

すると本当に「趙太祖飛龍記」平話の後代のテキストなるものが、都合良く存在したかは大いに疑問となる。南宋王を持ち出すのは循環論法に過ぎない。

『飛龍全伝』が生まれた乾隆年間（一七三六—一七九五）に、評話（話芸の一種）で趙匡胤が扱われていたことは、清涼道人「聽雨軒筆記」巻三から窺える。けれども、それが「趙太祖飛龍記」平話の流れを汲むとも考えにくい。そこでは五代後周の太祖である郭威の死因を、高行周に祟られたからだとしている。郭威の死は「南宋志伝」でも虚構的に描かれるが（第二十九回）、それは高行周とは関係ない。「南宋志伝」の二つの来源のうち「五代史平話」は彼の死に虚構を交えないので（「周史平話」下）、これは「趙太祖飛龍記」平話に由来すると考えられよう。すると「聽雨軒筆記」が伝える「飛龍伝」評話とは異質の内容であることになる。したがって乾隆年間の「飛龍伝」評話が、「趙太祖飛龍記」平話の流れを汲むとは言えない。

さてイデマは、「南宋志伝」なる題名の由来を説くとき、南宋王の地位が趙匡胤を皇帝へと押し上げたと説明していた。これは「飛龍全伝」の文脈にそぐわない。たしかに第五十八回で、彼は定国節度使と殿前都指揮使を「加授」されたのであって、その後も南宋王の肩書きを有してはいたかも知れぬ。けれどこの後、彼の即位へと至る第六十回の末尾まで、南宋王の語は出てこない。そして「飛龍全伝」に即しても、南宋王でなければ皇帝になれなかったとは認めないのである。すなわち史書の記載と同様、幼い皇帝に不安を感じた兵士たちが彼を皇帝に祭り上げるのであって、その理由は

趙普道わく「……検点は令名素より著し、中外心を帰す、一た

び汴梁に入らば、天下定まらん矣……」

（第六十回）

というものである。そして例の、世宗が木札を見て、殿前都「検点」を張永徳から趙匡胤に代えた逸話は、第五十九回に記されている。要するに、趙匡胤が即位時に南宋王でなくても、彼は容易に帝位に即けたというのが「飛龍全伝」の文脈である。

『飛龍全伝』第五十八回は、趙匡胤が定国節度使と殿前都指揮使になった点では史実の通りである。「飛龍全伝」は何故、その前に南宋王は乃ち閑職なり、久しく居る可からず、などと書かねばならなかったのか。「飛龍全伝」において、何か趙匡胤を一度は南宋王にする必要があって、その用が済んだから、南宋王は乃ち閑職、云々として南宋王の話を終わらせているのではないだろうか。

四 南宋王の用例（2）

『飛龍全伝』における南宋王の語の用例のうち未紹介の分を、ここで挙げてみよう。

南宋王趙匡胤出班奏道「汝南王鄭恩、前定陶家莊三春為室、尚未婚娶。乞聖上恩賜完姻、臣等不勝欣幸」……且說南宋王趙匡胤、一日請高懷徳到府商議道「陶三春勇力過人……」……「鄭恩」来到南宋王府中……。

（第五十二回）

「鄭恩」親到南宋王府中商議行事。匡胤將這婚姻礼数、一切底該事務、開示明白。

（第五十三回）

那文修和尚一馬当先、大声喝問「来将何人」王王武道「賊秃聴

着、乃大周天子駕前大元帥南宋王帳下都尉大將軍王壬武便是……」……「文修」上前問道「來者莫非南宋王麼」……文修見了大驚、道「原来南宋王乃是真命、我幾乎逆天……」

(第五十六回)

寿塘関守将王豹、這日正坐中堂、只見探子進來報道「周主差宋王、趙匡胤領兵前來犯界……」

(第五十七回)

以上は大きく二つの部分に分かれる。前半二例(第五十二〜五十三回)は鄭恩と陶三春の結婚話に、後半二例(第五十六〜五十七回)は南唐との戦闘場面に見える。

先に後半の南唐との戦闘場面を見ると、第五十六回は文修和尚との戦いで、まず名将王彦章の孫王壬武が文修和尚の法力に敗れるが、趙匡胤が赤龍の姿を現わしたので、文修和尚は天命を悟って戦線を離れるという話である。また第五十七回は王豹の操る魔犬に後周の呉輪が敗れるが、鄭恩が黒虎の姿を現わして勝利を収めるという話である。

これらは「南宋志伝」に基づく記述の間に見え、比較的短い。大いに挿入を疑わせる。たとえ趙匡胤の平話に由来するとしても、彼が南宋王であることは話の内容とは関係が無い。たとえば文修和尚は赤龍の姿に恐れ入ったのであって、南宋王の肩書きにひれ伏したのではない。また王豹を敗ったのは鄭恩である。したがって少なくとも南宋王の語は、先程の例と同様、「飛龍全伝」で挿入されたに過ぎまい。

次に前半の鄭恩と陶三春の結婚だが、元の雜劇や明の「南宋志伝」の段階では鄭恩の結婚に関する話が語られていた痕跡は無く、明末清初の李玉の「風雲会」伝奇でも、鄭恩は趙京娘という別の、

しかも全く異質の女性と結婚することになっている⁽¹²⁾。すなわち趙京娘は、追剥ぎにさらわれ趙匡胤に救われるような弱い女性だが、陶三春は、瓜を盗もうとした鄭恩を負かすほどの豪傑である。また結婚に至る経緯も全く異なり、「風雲会」の場合は鄭恩が京娘の父趙信に見込まれるのだが、「飛龍全伝」では陶三春が趙匡胤に見込まれるのである(「飛龍全伝」第四十〜四十二回参照)。したがってこちらも古い来歴を持つ話とは考えにくく、やはり挿入されたものだろう。

それはさておき、「飛龍全伝」において彼が南宋王と呼ばれる必要があるとすれば、それはこの鄭恩の結婚のためだと考えられる。

実は陶三春は、鄭恩が王位に即けば結婚すると条件を出していた(第四十二回)。

三春道「……這親事允便允了、但我陶三春在家等待、只以三年為期。這三年之内、鄭恩若有了王位、便來娶我。若無王位、叫他不必來娶……」

(陶三春は「……この縁談は受けてもいいけど、あたしが待つのは三年だけよ。三年で鄭恩が王位に即いたら、お嫁に行くけど、それが駄目なら、お嫁に行かない」と言った。)

そして汝南王になった鄭恩は、めでたく陶三春と結婚する(第五十二〜五十三回)。

鄭恩が王なのに、兄貴分の趙匡胤を王にせずに済ませようか。

果たして鄭恩が王になったのは既述のように第五十二回、趙匡胤と同時に昇進であった。これを受けて趙匡胤は、二人の縁談を世宗に報告し、陶三春を迎えに行くのである。

鄭恩の結婚話は、「飛龍全伝」の作者呉璿の創作では無いかもしれない。民間伝承ならば、王が山賊の自称でも良いのであり、趙匡

胤との釣り合いを考慮する必要は無い。陶三春が鄭恩の死後、各地の山賊を従えて趙匡胤を助けるといふ荒唐無稽な話が、同治年間（一八六二〜一八七四）になって『宋太祖三下南唐』なる題名で刊行されている。ところが、この話の梗概は『飛龍全伝』第四十回に既に後日談として紹介されている。おそらく鄭恩が王となって陶三春と結婚する話は、乾隆年間には存在したのであろう。

一方、鄭恩が汝南王に封ぜられたことは、馬致遠『西華山陳搏高臥』雜劇の第三・四折や李玉『風雲会』伝奇の第二十六齣に見えるから、何か来歴がありそうだが、ただどちらにおいても、王になつたのは趙匡胤の即位後である。

これらを組み合わせて『飛龍全伝』のごとき結婚話が成立したと考えられる。ところが結婚の時期が趙匡胤の即位前になつたので、釣り合いの上、趙匡胤も王にする必要が生じてしまった。そこで粉本たる『南宋志伝』にちなんで、南宋王としたのであろう。

南宋王から『南宋志伝』が生まれたのではなく、その逆であると筆者は考える。

五 『南宋志伝』の版本（一）

ここまで論じたのは内容面から見て、『飛龍全伝』の南宋王は『南宋志伝』に先行するものではなからう、ということであった。以下は別の角度から論を進めよう。

『南宋志伝』の題名には、初めから『南宋』の二文字が入っていたのだからか。

イデマが用いた『南宋志伝』は、『南宋飛龍伝』と題する香港のテキストで、何時のものかは明記されていないと言ふ（p. 109）。

彼はテキストとしての有効性は、『五代史平話』との字句の一致から証明されるとして、これを用いている。そして、そのテキストを『南宋志伝』と称することに特に説明は無い。

本稿でも、既述のように明代のテキストは内容に大差が無いので、影印の最も普及した世徳堂刊本に従つてこの名称を用いてきた。イデマの説明からすれば、彼の用いたテキストも内容に大差は無いのであろう。だから通称として用いるのは構わない。ただし、それは飽くまで通称なのである。

ここで明代の版本に絞つて、テキストがどんな題名を称しているかを通覧してみよう。さしあたり孫楷第『日本東京所見小説書目』（人民文学出版社、一九八一年）によるならば、古い順に次の三種がある。

『全像按鑑演義南北南宋志伝』（以下、三台館刊本と呼ぶ）

『新刊出像補訂參采史鑑南宋志伝通俗演義題評』（世徳堂刊本）

『新刊玉茗堂批点繡像南北南宋志伝』（以下、葉崑池刊本と呼ぶ）

三台館刊本と葉崑池刊本に見える『北』の字は、『南宋志伝』に内容の接続する『北宋志伝』を指す。世徳堂刊本にも『新刊出像補訂參采史鑑北宋志伝通俗演義題評』があり、やはりセットを成している。この『北宋志伝』は、主に楊家将を描く話で、時代背景は北宋のおよそ前半、『南宋志伝』の結末を承けて真宗（在位九九八〜一〇二二）の治世までだが、史実との接点は『南宋志伝』より更に少ない。世徳堂刊本に従えば、『南宋志伝』と同じく十巻五十回から成る。

詳しく見ていくと、三台館刊本の場合、目録に書かれた題名は前記の通りだが、封面は『全像南宋南北誌伝』、各巻の巻頭と巻末は『新刻全像按鑑演義南[or北]宋志伝』（ただし、『南宋』の巻末

尾は「全像南宋誌伝」とする。また序は「叙「南北両宋伝」序」と題し、その文中では書名を「南北宋両伝演義」と称している。版心は「全像南」○「北」宋志伝である。

世徳堂刊本の場合、各巻の巻頭と巻末で脱落や省略はままあるが、基本的に上記の書名と同じで、序は「叙撰「南」○「北」宋志伝演義」、版心は「南」○「北」宋志伝である。「南北(両)宋」とする箇所は見られない。なお「南宋」の序に「五代伝志」なる書名が見えるが、これについては第七節で論じる。

葉崑池刊本の場合、目録は「新鑄玉茗堂批点按鑑參補出像南宋志伝」、各巻もそれに倣う(巻一だけは「新鑄玉茗堂批評按鑑參補出像南宋志伝」)。序は「南宋志伝」序」と題し、内容は世徳堂刊本とはほぼ同じである。版心は「南宋志伝」である。

要するに「南宋」と「北宋」に分ける場合と、「南北(両)宋」を称する場合とがあることになる。両者の関係はどうか。

孫楷第は原本について、まず「南宋志伝」が出て、次に「北宋志伝」が出たと考えた。それは「北宋志伝」が「続集」とか「後集」と、按語などで呼ばれているからである。ところが、この考え方は内容に照らして成り立ちにくいことが、イデマや馬力といった南宋王説を取る人たちによって論証されている。すなわち「南宋志伝」第三十二〜三十四回に楊家將が登場するが、彼らは「北宋志伝」の主役であり、かつその運命は、「南宋志伝」で既に予言されている。つまり二作品は同時に構想されたと考えられるからである。

さて二作品が同時に構想されたなら、題名も本来一つだったのではなかるうか。つまり「南北(両)宋」を称する方が、「南宋」と「北宋」に分けるより題名として原型に近いのではあるまいか。

ここで巻数の数え方に着目したい。世徳堂刊本や葉崑池刊本は、

「南宋志伝」・「北宋志伝」とも巻一から始まり巻十で終わる。ところが三台館刊本の場合、「北宋志伝」は巻十一から始まり巻二十で終わっている。つまり「北宋志伝」巻一〜十は、三台館刊本では存在しないのである。これは「南宋志伝」と「北宋志伝」が一体であるという意識の表れと言えよう。

そして興味深いのは、北京大学図書館が蔵するもう一つの世徳堂刊本である(注(2)参照)。実はここでも、「北宋志伝」は巻十一に始まり巻二十に終わっている。題名自体は、先に紹介した内閣文庫蔵の世徳堂刊本と同じであり、世徳堂刊本は一度も「南北(両)宋」を称していないのに、なぜ「北宋志伝」が巻十一から始まっているのだろうか。

二つの世徳堂刊本は、傷の位置が一緒だったりして、同一の版本であることは間違いない。内容も同じである。ただ北京大学図書館蔵本は巻五・七・九の巻頭に「文台余氏双峰堂校梓」と記し、巻二十には「書林双峰堂、文台余氏梓」の木記がある。また内閣文庫蔵本はしばしば版心下部に「世徳堂刊」とあるが北京大学図書館蔵本は一切無い。さらに北京大学図書館蔵本の挿図に無いものが、内閣文庫蔵本では描かれている場合がある。たとえば巻七「五台山楊業參禪」の下部中央に、内閣文庫蔵本では庭石と花のようなものがあるが、北京大学図書館蔵本には無い。他に北京大学図書館蔵本における本文中の略字が、内閣文庫蔵本では正字である場合も見られる。

要するに一方が他方に修正を加えたことになるが、その背景については諸説ある。私見では、巻一〜十から巻十一〜二十に直して、「南宋志伝」と「北宋志伝」を一体化したとは考えにくい。それから題名もどこかで「南北(両)宋」と呼びそうなものである。何か基づく所があって、北京大学図書館蔵本では巻十一〜巻二十として

しまったが、内閣文庫蔵本は「北宋志伝」が巻十一から始まるのはおかしいと感じて、巻一から始まるように直したと思われる。

すると本来「南北(両)宋」巻一〜二十だったものが、次第に「南宋」・「北宋」それぞれ巻一〜巻十へと改められて行き、それが葉真池刊本では総称として再び「南北宋」を使うようになった、と想定することが可能であろう。

この見通しに必要な修正を加えるべく、更に検討を進めよう。

明代の三つのテキストの前後関係を、孫楷第は先に掲げた順に新しくなると考えた。それは二つの理由がある。まず三台館刊本は回を分けて、葉真池刊本はその後のテキストと序などが同じであるといった、形式面が手がかりになる。また序の執筆時期について、

三台館刊本に明記は無いが、世徳堂刊本には「癸巳」(一五九三?)、葉真池刊本には「万曆戊午」(一六一八)と記されている。葉真池刊本が後出であることはまず動くまい。

しかし、三台館刊本と世徳堂刊本の前後関係は、いささか微妙である。これについては前掲の上田論文に以下の指摘がある。

両者を一部対校してみたところ、原本から文字が欠落していると思われる箇所がそれぞれあり、恐らく基づくテキスト(原刊本であったかもしれない)が別々にあったと想像される。

つまり字句の異同に着目すれば、必ずしも三台館刊本が古いとは言えないのである。

もし世徳堂刊本の方が古い要素を留めており、それが題名にも及ぶのなら、「南宋」と「北宋」を合わせて「南北(両)宋」と称した可能性も否定できない。二つの刊本の原本がどんなものであったのかを考える手がかりは、他に無いだろうか。この点について、次節で考えてみたい。

六 「南宋志伝」の版本(2)

先に掲げた三種以外の明代のテキストとして、孫楷第は「中国通俗小説書目」(人民文学出版社、一九八二年)で、鄭因伯の蔵する「新刻全像按鑑演義南北宋伝題評」(以下、鄭因伯旧蔵本と呼ぶ)に言及し、上図下文で半葉十二行、行二十二字、巻四から巻七までが残るとする。これは「北京図書館古籍善本書目」(書目文献出版社、一九八七年)の集部小説類にも記載されている。そこでも明刻本とした上で、十二行二十二字、上黒口あるいは上白口、四周双辺で、やはり巻四から巻七までが残るとする。

この鄭因伯旧蔵本はマイクロフィルムを見た限りで言えば、三台館刊本や世徳堂刊本より古いと考えられる。三者の関係を示す部分を例示しよう。まず世徳堂刊本第十六回に

匡胤謂柴榮曰「……既是兄長要往同台探親、即此分別。不知何日再逢」匡胤曰「天有其緣、必不相違……」

とあるが、ここで趙匡胤の言葉が繰り返されるのはおかしく、発言内容も噛み合わない。そこで対応する三台館刊本巻四「大舍途中打董達、匡胤華山訪陳搏」を見ると、

匡胤謂柴榮曰「……既是兄長要往同台探親、即此分別」柴曰「吾与賢弟相隨未久、既此分別、不知何日再逢」匡胤曰「天有其緣、必不相違……」

とある。つまり世徳堂刊本は、趙匡胤の第一の発言の末尾と続く柴榮の発言の前半を飛ばしてしまったのである。それは「即此分別」と「既此分別」を混同した、よくある誤りだが、鄭因伯旧蔵本巻四「大舍途中打董達、匡胤華山訪陳搏」を見ると、三台館刊本と全く



校舍歇息

新刻全像按鑑演義南北宋傳題評卷之四

漢天福十三年丁未歲是歲凡五國二鎮

至漢乾祐元年戊申歲首尾九二年事實

大舍途中打董連

匡胤華山訪陳搏

却說鄭恩推將輦子與柴趙三人過却周橋壩前役民舍

歌自鄭恩將傘輦安頓一邊匡胤分付鄭恩曰柴兒衣服

垢汪汝代之於溪邊浣洗而回鄭恩領命去了匡胤曰兄

長且在店中坐歇鄭弟好飲酒我往前村沽買一壺便來

祭見二人都去正待倚木凳略睡一時忽聞舍外喊聲大

振榮在壁孔中看時見一夥強人直殺入來榮慌張走入

後園躲避董連進入舍中不見其踪乃白分明見後此安

歇如何不在即令手下搜之上見一輦在房中董連怒

同じであり、これが本来の姿と考えられる。

次に世徳堂刊本第十六回をもう暫く読んで行くと、

却説鄭恩……尋見匡胤、道知「且得木鈴関主韓通駅給夫馬、直送到女鬼府投見、小弟辞回赴約」匡胤曰……

とある。ところが三台館刊本巻四「大舎途中打董達、匡胤華山訪陳搏」の対応箇所では

却説鄭恩……尋見匡胤、道知前事。匡胤曰……

としか書いていない。そこで鄭因伯旧蔵本巻四「大舎途中打董達、匡胤華山訪陳搏」を見ると、今度は世徳堂刊本と一致する。つまり三台館刊本が鄭恩の具体的な発言内容を略したのであって、世徳堂刊本が潤色したのではない。

鄭因伯旧蔵本は巻四から巻七までしか残っておらず、かつ巻七第十二葉と第二十六葉の末尾半葉数行分も失われている。だがその範圍で言えば、いま例を挙げたように、三台館刊本と世徳堂刊本いずれかの欠落ないし省略と認められる部分を、鄭因伯旧蔵本は共に有しており、他に不足も無い。これ（もしくは同系統のテキスト）に基づき、意図のないし無意識に変更された二系統のテキストとして、三台館刊本と世徳堂刊本とを想定して良からう。逆に言えば鄭因伯旧蔵本は、現存する最も原本に近いテキストと考えられる。

ちなみに孫楷第は「内容は通行本と（与）異なれり」と記すが、話の内容が異なるわけではなく、計二十則の則目も全て通行本と同じである。「此の書余は未だ見ず、板刻の原委を知らず」と言っているから、伝聞の誤りであろう。

さて以上の点を踏まえると、この鄭因伯旧蔵本が「新刻全像按鑑演義南北宋伝題評」、つまり「南北宋伝」と題するのも大きな意味を持つて来る。具体的には、巻四の巻頭・巻五の巻頭巻末がこのよ

うに題し、巻四の巻末・巻六の巻頭・巻七の巻頭は「題評」を略し、巻六巻末は余白の關係で「六巻終」としか書いていない。

興味深いのは版心である。三台館刊本は「全像南[口]北」宋志伝、世徳堂刊本や葉崑池刊本は「南宋志伝」であった。ところが鄭因伯旧蔵本は「全像南北宋伝」とする。つまり「新刻全像按鑑演義南北宋伝題評」の略称が「全像南北宋伝」なのである。略称には名前の核心部分を使うであろう。その核心が「南宋」ではなくて「南北宋」なのである（なお第九節参照）。

つまり最も原本に近いと考えられる鄭因伯旧蔵本は、「南宋志伝」部分でありながら必ず「南北宋」を使っているのである。もちろん残本だから、その点は割り引くとしても、前節で推定したように原題は「南北宋」であり、「南宋志伝」という題名は本来のものでなかった可能性が強まると言えよう。

更に古いテキストがあつて、それが「南宋志伝」を称していた可能性はあるだろうか。節を改めて検討して行こう。

七 『南宋志伝』の作者（一）

『新刻全像按鑑演義南北宋伝題評』（鄭因伯旧蔵本）の刊行年代を、孫殿起『版書偶記続編』（上海古籍出版社、一九八〇年）は「約明嘉靖間刊」とする（巻十二、小説家類小説演義之属）。もしその通り嘉靖年間（一五二二〜一五六六）の刊本なら、最古のテキストと言えよう。たしかに三台館刊本と比較して、挿図も字体も精緻な印象を与える。両者は上図下文という点で、共に典型的な建安刊本だが、そうした外見からして既に、鄭因伯旧蔵本が先行し三台館刊本が後出であるとは予想される。

ところで孫楷第は鄭因伯旧蔵本について記した後、『日本の友人長沢規矩也より来信ありて云わく、最近殘本『南北宋伝』を見る、是れ余象斗の作なりと』なる一文を付している。長沢氏が見たのも鄭因伯旧蔵本だったかも知れない。上図下文の形式から余象斗の名を想起するのは自然なことである。もし余象斗が手掛けたものなら嘉靖年間の刊行と考えるのは時期的に苦しい。

余象斗（一五六〇？〜一六三七？）は万暦年間に小説など多数の出版物を手掛けた福建の書肆で、三台館山人とも称した（肖東甓「明代小説家、刻書家余象斗」、『明清小説論叢』第四輯、一九八六年参照）。三台館刊本は彼の手になるものであり、封面には『三台館梓行』、巻之一には『譚陽書林三台館梓行』とある。巻頭の「叙『南北宋伝』序」の結びは『三〇〇〇山人言』と破損があるが、彼の署名と認められる。この序で余象斗は

昔、大本先生は建邑之博洽の士也。遍く群書を覽、諸史を涉獵し、乃ち宋の事を綜核し、彙めて一書と成し、名づけて『南北宋伝演義』と曰う……。

と記している。これによっても、書名は『南北宋両伝演義』（または『南北宋伝』）であって、『南宋』、『北宋』に分かたぬ『南北宋』であることが読み取れる。

さてこの序によれば、『南宋志伝』の作者は大本先生である。大本先生とは熊大木を指すと考えるのが孫楷第『日本東京所見小説書目』以来の通説であり、筆者も異論は無い。

もっとも馬力は、熊大木は『南北宋両伝演義』の作者であっても『南宋志伝』・『北宋志伝』の作者ではあるまいと言う。「叙『南北宋伝』序」によれば『南北宋両伝演義』は歴史上の南北宋を描く内容と考えられるから、序は誤って付されたものである。一方で世

徳堂刊本の序は原序かどうかはともかく、『南宋志伝』・『北宋志伝』の内容に即したもののだが、そこに熊大木の名は出て来ない。この二つが馬力の、熊大木を作者と考えない理由であり、比較的合理的な推測だとしている。

しかし熊大木に歴史上の南北宋を描く作品があったとは考えにくい。後述するように、彼には南北宋の交代期を岳飛を中心に描く『大宋演義中興英烈伝』があるのに、更にそうした作品があると考えるならもっと根拠を示してほしい。

また世徳堂刊本は、既に『南宋志伝』・『北宋志伝』編纂のいきさつを把握しておらず、そこに熊大木の名が出てこなくても否定材料にはならない。『北宋志伝』第一回の眉批には、

此巻もて北宋と為すは是なり矣、以前の諸巻もて南宋と為すは甚だ誤れり、宋は徽・欽の北轍し高宗の南遷して自り南宋と為す耳。

とある。『南宋志伝』なる題名に対する世徳堂刊本の素朴な疑問は、今日の我々のそれと変わらず、そうした認識の一方で作者問題を正確に把握していたとは考えにくい。

世徳堂刊本の各巻巻頭には、『姑孰陳氏尺蠖齋評釈、繡谷唐氏世徳堂校訂「梓」』とある。この陳氏尺蠖齋と唐氏世徳堂は、その『南宋志伝』の序に出版のいきさつを

光祿既に取りて之を鏤するに、(而)言を鄙人に質す。

と記す泛雪齋と、そこに見える光祿であろう。陳が手を入れ唐が出版した長篇小説として有名なのは『西遊記』である。その世徳堂刊本は百回本の繁本として『西遊記』研究上重要なテキストだが、壬辰（万暦二十年、一五九二）に陳元之が書いた序は、『西遊記』の旧本に言及した上で、『唐光祿既に是の書を購い、之を奇とし、好

「事の者を益俾せんとして之が為に訂校し……而して叙を余に（於）充つ」と記す。陳元之は秣陵（南京）の人とされ、姑孰が安徽なのは異なるが、同じ二人と考えて良からう。そしてこの場合も、彼らの段階で既に旧本「西遊記」の来歴は不明だった。

ちなみに世徳堂刊本「南宋志伝」の序には、「五代伝志」なる書物に趙匡胤の虚構的な事跡が色々見えるとある。馬力はこの「五代伝志」が「五代史評話」、つまり「五代史平話」だと言うが、机上の空論である。「五代史平話」に趙匡胤の虚構的な事跡は殆ど記されていない（注（4）参照）。

余嘉錫は「五代志伝」が「南宋志伝」の原題だと考えた。馬力はこれを「信ずるに足らず」と一蹴するが、世徳堂刊本の序に重きを置く彼の論法からすれば、そう簡単には退けられない筈である。もっとも「五代」を称する作品としては他に「殘唐五代志演義」があるが、趙匡胤の活躍を殆ど描かないから、やはり「五代伝志」とは別物であろう。この「五代伝志」を筆者は、世徳堂刊本の刊行準備段階での、「南宋志伝」に対する擬題ではないかと思っている。世徳堂刊本は「南宋志伝」なる題名への疑問を表明していた。そこで内容に照らして、また「北宋志伝」に合わせて、仮に「五代伝志」と呼んだのではないか。ただしこの想定には、「殘唐五代志演義」との前後関係の問題が絡むので、なお検討が必要だが、当面こう考えておく。

話を三台館刊本に戻せば、馬力は三台館刊本の巻一冒頭に「雲間眉公陳繼儒編次」とある点にも注意を払って、陳繼儒（一五五八〜一六三九）が作者である可能性を検討している。そして陳繼儒と歴史長篇小説との一定の関係を認めながらも、一方で偽託の実例があり、また彼の詩文には趙匡胤や楊家将への言及が無いことから、

「南宋志伝」・「北宋志伝」の作者とは考えにくいとする。

これについては、馬力の説に従いたい。陳繼儒と歴史長篇小説との関わりは、序を書いたり評を付けたりといったもので、「東漢十帝通俗演義」、評についてはさらに「新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝」、本文そのものには関わらなかったと思われるからである。なお孫楷第は「日本東京所見小説書目」で、「東漢十二帝通俗演義」の序を、文のまずさから偽託かと疑っているが、陳繼儒の仕事には多くの人の下働きがあったから、あるいは名前を貸しただけなのかも知れない。また「南宋志伝」の成立が嘉靖年間に遡るなら、陳繼儒の作ではあり得なくなる。

本稿では熊大木を作者と考えた上で、鄭因伯旧蔵本の性格を考えたい。

八 『南宋志伝』の作者（2）

熊大木（鍾谷。一五〇六？〜一五七九？）は、やはり福建の書肆の家柄で、嘉靖年間に多くの歴史長篇小説を手掛けたことで知られる（方彦寿「明代刻書家熊宗立述考」、『文献』一九八七年第一期参照）。そのような作品として、孫楷第は以下の三つを挙げる。

『全漢志伝』（西漢志伝）・『東漢志伝』

『唐書志伝通俗演義』

『大宋演義中興英烈伝』

また大塚秀高「講史章回小説の出版と改変―『列国志』をめぐる―」（『中国古典小説研究動態』第三号、一九八九年）によれば、『列国志』も熊大木の原著であった。

これらが熊大木の作と考えられる根拠は一樣ではない。『全漢志

伝⁽²³⁾の場合は、その『西漢志伝』巻之一冒頭に「繁峰後人熊鍾谷編次」とあること。『唐書志伝通俗演義』は巻之一冒頭にやはり「繁峰熊鍾谷編集」とある他、それに続いて「鍾谷子古風一篇を述ぶ」として古詩を載せ、巻之一第七節にも「鍾谷『演義』此に至り、亦七言四句を筆し……」として七言絶句を載せ、さらに李大年の序にも『唐書演義』は書林熊子鍾谷の編集なり」とあること。『大宋演義中興英烈伝』の場合も巻之一冒頭に「繁峰熊大木編輯」とあり、さらに「熊大木鍾谷」の序があることが根拠である。

また『列国志』の場合だが、大塚論文の所説を敷衍すれば、万曆丙午(三十四年、一六〇六)重刊の序を持つ余象斗刊本巻之三の四十三葉bに「鍾谷先生の詩に云う」として七言律詩を載せているのは、熊大木の原書から削り残されたものと考え得る。というのも余象斗の刊本では、すでに孫楷第が指摘しているが、『唐書志伝通俗演義』のように「紅雪山人余應鰲編次」と称したり冒頭の古詩から「鍾谷子……」という説明を削るなどして熊大木の原作であることを隠そうとしているのに巻之一第七節「鍾谷……」の所は削り忘れている、という例があるからである。

さて熊大木の手掛けた長篇歴史小説は、しばしば楊氏の書肆から刊行されている。たとえば『唐書志伝通俗演義』は嘉靖三十二年(一五五三)に楊氏清江堂から、また『大宋演義中興英烈伝』は嘉靖三十一年(一五五二)にやはり楊氏清江堂から出版されている。清江堂も福建の書肆であり、後者の序によれば、主人は楊湧泉である。ただし、『大宋演義中興英烈伝』は巻之八の木記によれば楊氏清江堂の出版だが、巻之一巻頭や、巻之八に続く「精忠録」後集では(楊氏)清白堂」としている。そして『全漢志伝』末尾の木記にも「清白堂楊氏梓行」とある。この清白堂の主人としては楊新泉や

楊麗泉が考えられ、泉という字を共有する点を踏まえれば、楊湧泉も含めた三人は同世代の同族であり、彼らと熊大木は出版社と専属作家のごとき関係があったと、二つの大塚論文(本文前掲のもの)と注(26)所引のもの)では想定されている。

では熊大木と余象斗との関係はどうなるのだろうか。『南宋志伝』三台館刊本の序で、余象斗は「南北宋西伝演義」が熊大木の著作であることを述べ、その力作たることを評価していた。ところが『唐書志伝通俗演義』の場合、逆にそれが熊大木の作であることを隠そうとしていた。『列国志』も同様に想定し得た。また『大宋演義中興英烈伝』でも序から熊大木の名を削り「三台館主人言」と改めていることを孫楷第が指摘している。さらに『全漢志伝』についても実は余象斗らの刊行と想定でき、その『西漢志伝』の序で編者とされる「名公」は熊大木であろう。つまり余象斗は、しばしば熊大木の作品を我がもの顔に出版しているのである。その背景の一つとして活動時期の違い、すなわち熊大木の晩年に余象斗が生まれたと考えられる点が挙げられよう。

ところで余象斗と楊氏の書肆にも一定の関係が認められる。前述のように、『唐書志伝通俗演義』や『大宋演義中興英烈伝』は楊氏の書肆から出た後、余象斗が改めて出版している。注意すべきは、その際に上図下文の形式が採用されていることである。この形式自体は古い淵源を持ち福建刊本の特徴とされるけれど、楊氏も福建の書肆でありながら先の二書はこの形式を採らない。前者は無図だし、後者は序と凡例に続いて二十四葉三十幅の図を載せるけれど、本文はやはり無図である。この背景としては、やはり出版時期の違いが想定できると、これも大塚論文が既に指摘している。

すると『南宋志伝』鄭因伯旧藏本も上図下文である点が注目され

る。仮に熊大木の書き下ろしを楊氏が出版したのが原本だとすれば、これが鄭因伯旧蔵本に当たると考えるのは苦しく、後者は余象斗の手に成る可能性の方が高からう。

もっとも楊氏の書肆においても、のちに『三国演義』や『西遊記』などが上図下文形式で出版されている。ただこれらは万曆三十一〜崇禎四年（一六〇三〜一六三一）の刊行と考えられ、⁽³⁰⁾『南宋志伝』の三台館刊本や世徳堂刊本よりも時期が遅い。ちなみに、『大宋演義中興英烈伝』で二つの書肆名が使われたり、『全漢志伝』の刊行者名が錯綜していること（注（27）所引の諸論に詳しい）、そして後者が上図下文形式を採用することを考え合わせれば、楊氏の書肆における出版方針の変遷が窺えよう。

また上図下文形式を始めたのは余象斗ではない。たとえば『三国演義』でこの形式の最古の版本は、嘉靖二十七年（一五四八）の序で「像を加え」たことを宣言しており、内容的にも余象斗が刊行した同系統の版本より明らかに先行する。⁽³¹⁾あるいは『水滸伝』の場合も、この形式の破本がヨーロッパの数ヶ所に残り、やはり内容から余象斗の版本に先行し、かつ彼の手になるものではないと考えられる。⁽³²⁾

とはいえ、これまでに述べた熊大木と楊氏・余象斗の因縁や形式面の特徴を差し置いてまで、鄭因伯旧蔵本が楊氏でも余象斗でもない書肆から出版されたと考えざるべき積極的理由は無さそうである。

余象斗には、『三国演義』を短期間に二回、版を改めて刊行した例があり、⁽³³⁾この点も鄭因伯旧蔵本が余象斗の手に成る可能性を妨げない。現状では、『南宋志伝』は熊大木の原本が楊氏から出版され、余象斗が上図下文形式で再版したのが鄭因伯旧蔵本である、と考えておきたい。

九 熊大木の原題

さて鄭因伯旧蔵本が余象斗の手に成るとしても、内容が大きく改変されているか否かは別である。これについては三台館刊本の序が、素直に熊大木の名を出し、肯定的に評価しているのが示唆的である。余象斗は出版の際には、何らかの手を加えるのが通例である。著者を偽ったり図を加えたり、評を入れたり新しい話を足したり、逆に部分的に本文を削ったりする。それ自体は、特に万曆年間に入ると他の書肆も頻繁に行なうけれど、彼の場合は自分の手が入っていることを前面に出すのが特徴である。よく自分の詩や評を挿入し、『水滸伝』では余程という同姓のチョイ役を不自然に活躍させている。⁽³⁴⁾別の作品で熊大木の名を消そうとしたことも既に触れた。

ところが三台館刊本『南宋志伝』の場合、本文を少し短くしているが、内容に大きく影響する不足ではないこと、上述の通りである。余象斗の詩も挿入されていないし、⁽³⁵⁾余姓の登場人物もない。これは鄭因伯旧蔵本においても同様であり、さしたる改変は無いことを予想させる。

世徳堂刊本との間に大差が無いことも、鄭因伯旧蔵本が本来の内容を保っているという解釈に有利に働くであろう。世徳堂は金陵（南京）の書肆だが、一般にこの土地の書肆の出版物は、福建のそれに比べれば日本への加工の度合いが小さい。たとえば万曆年間以降に出版された『三国演義』において、前者では諸葛孔明の南征に際して関索が顔を出す程度に過ぎない。だが後者では、赤壁の戦いの中から関羽の死後にかけて花関索が度々登場し、かつ内容が明の

成化年間（一四六五—一四八七）に刊行された説唱詞話『花関索伝』と、その虚構性において一定の相関性が認められる。

『唐書志伝通俗演義』や『大宋演義中興英烈伝』については、熊大木の原本（に相対的に近いもの）が楊氏の書肆から刊行され、のちに余象斗や金陵の書肆も出版している。とくに前者の金陵刊本は世徳堂から出ており、『南宋志伝』の出版状況に近い。この二書の場合、説話の挿入といった積極的な加工は為されていないが、余象斗が自著を装ったことは既に見た。金陵刊本はそこまでしていない。そしてこれらは本文に若干の省略が見られる点で三台館刊本と相通するが、鄭因伯旧蔵本とは異なる。

こうした状況から見て、鄭因伯旧蔵本が内容的に原型を留めていることは、否定しにくいと筆者は考える。それが、『新刻全像按鑑演義南北宋伝題評』を称しており、一方でこの作品については大して改変していない余象斗が、著者を素直に熊大木と述べた上で原題を『南北宋両伝演義』と記している以上、原題も『南北宋』であって『南宋』・『北宋』ではなかったと言えよう。

もっとも、『唐書志伝通俗演義』や『大宋演義中興英烈伝』という題名は、熊大木の原題ではないと言う向きがあるかも知れない。前者は楊氏刊本の目次に「新刊『秦王演義』目録」とあるし、最終葉である巻八の末尾にも「新刊京本『秦王演義唐国志伝』巻之八終」とある。後者は熊大木の序が「序『武穆王演義』」と題される。つまり主人公たる唐太祖李世民や岳飛を「秦王」とか「武穆王」と呼び、題名にしている。

そこで、『南宋志伝』も趙匡胤が主人公と見做せるから、やはり『南宋王』の略称ではないかと思う人もいるのであろう。馬力は『南宋王趙匡胤出身伝』なる原題を想定し、イデマは『大唐』・『秦

王』詞話』との内容の類似を指摘していた。

この考え方は、しかし多くの飛躍がある。たとえば秦王や武穆王の名は史実に由来するが、南宋王は違う。あるいは唐太宗を秦王と呼ぶことは、唐人の詩に既に見られ、岳飛に関する虚構は『会纂宋岳武穆王精忠録』の名の下にある程度集められている。『会纂宋岳武穆王精忠録』は、いわば岳飛の資料集であるが、これを基に熊大木が書いた歴史長篇小説が『大宋演義中興英烈伝』だと考えられる。ところが趙匡胤の場合、『飛龍全伝』以前において、彼が南宋王と呼ばれていた痕跡は無かった。

イデマが言う内容の類似にしても、権力奪取に伴う倫理的矛盾は李世民と趙匡胤の専売特許ではない。また李世民の場合は、秦王から帝位に即いたからイデマの言うように『秦王』の名に象徴性を読み取ることも可能だが、『飛龍全伝』の趙匡胤は既述のように、南宋王とは別の地位を与えられた上で帝位に即している。したがって、南宋王の地位が趙匡胤を帝位に即けたというイデマの解釈は成り立たないことは、第三節でも論じた。

『秦王演義』や『武穆王演義』は擬題や通称の類ではないか。または『秦併六国平話』のように『秦始皇伝』と副題が付くケースもある。『南宋志伝』にそういったものがあつたとしても、それは『南宋』ではなく、『飛龍』と考える方がよほど蓋然性が高い（第一節参照）。そもそも熊大木の『全漢志伝』や『列国志』の場合、個人名が原題に入っていたと考えるべき材料が無い。

原題が『南北宋伝』ではおかしいだろうか。たとえば『全漢志伝』の場合、『全漢』を称するのに靈帝の即位で終わってしまい、彼と獻帝の治世は描かれない。あるいは『唐書志伝』の場合も、太宗の治世で終わっており、その後の二百年ほどは描かれない。それ

は「南北宋伝」が南北宋三百年の全てを描かないのと同じことではないか。

あるいは「東西両晋志伝」とか「東西両晋演義」と題して、西晋の成立から東晋の滅亡までを描く作品が万暦年間以降に出ている。⁽³⁹⁾時代順なら、総題は「西東両晋」とすべきであろう。そうしないのは「東西」こそが自然な語順だからである。同様に南と北なら「北南」ではなく「南北」とするのが自然である。

要するに「南北宋」の「南北」は、慣用表現にのっとった修飾語であり、宋代全体を指すと思わせるための誇大広告なのである。そんな意味に過ぎないから、略称として前半は「南宋」、後半は「北宋」が機械的に割り振られ、やがて正式名称になったのであろう。鄭因伯旧蔵本の版心に、「全像南北宋伝」の下に「南宋四卷」などとあるのがそれを示唆する。確かに問題のある用法であり、だから世徳堂刊本の段階で既に意味が分からなかったのだと思われる。

なお孫楷第は、原題は「宋伝」と「(宋伝)続集」であって、のちに南北の語がそれぞれに付いたと解していた。なるほど「宋伝」の語は「残唐五代志演義」の結びに「余は『宋伝』に見ゆ、此の編は多く録せざる也」とあるが、「残唐五代志演義」は趙匡胤の即位で終わっている点に留意すれば、むしろ「北宋志伝」を指すとも考えられる。一方で「南宋志伝」も趙匡胤即位後を描いているし、「残唐五代志演義」は五代の後半を簡略に描く点で「南宋志伝」と相補う。けっきょく「宋伝」は略称で、「南宋志伝」と「北宋志伝」を合わせて呼んだのではないか。時期的に遅れる葉真池刊本が「南北宋伝」を称するのが傍証となろう。ただし葉真池刊本は世徳堂刊本に基づいているから、この「南北宋伝」は古形を留めるのではなく、新たに付された総称だと考えられる。

十 おわりに

まとめれば、本来は「南北宋伝」だったものが「南宋志伝」と「北宋志伝」に分かれ、「南宋志伝」から「南宋王」の称が生まれたのだというのが、冒頭の問題に対する筆者なりの解答である。

上述した論拠を黙殺して、南宋王の物語をミッシングリンクと想定する向きも、恐らくはあるだろう。そうした想定をする人々は、古いものが新しいものに痕跡を留めているという、ある種の意外性に魅せられているように思う。それは悪いことではないし、そうした場合も確かにある。けれども神話は、必ずしも昔からあるとは限るまい。今になって作られることも、珍しくはないのである。

注

- (1) 徳田武「解説」(『対訳中国歴史小説選集』7、ゆまに書房、一九八三年)参照。
- (2) 注(1)前掲書や「古本小説叢刊」第三十四輯(中華書局、一九九一年)などに影印がある。ところで北京大学図書館にも世徳堂刊本が蔵される。周華斌・陳宝富「存見旧楊家將小説版本輯録」(『楊家將演義』北京出版社、一九八一年)や胡士瑩「中国通俗小説書目」補(『明清小説論叢』第四輯、一九八六年)、大塚秀高「増補中国通俗小説書目」(汲古書院、一九八七年)、『中国通俗小説総目提要』(中国文联出版公司、一九九〇年)参照。両者の関係については、第五節で私見を示す。
- (3) W. L. Idema. CHINESE VERNACULAR FICTION. Leiden, 1974, p. 110. なお注(4)所引論文の注③参照。

- (4) 氏岡真士「五代史平話」のゆくえ—講史の運命—(『中国文学報』第五十六冊、一九九八年) 参照。
- (5) 活字本(中国戯劇出版社、一九九一年)に基づき、影印本(『明清善本小説叢刊』天一出版社、一九八五年)、『古本小説集成』上海古籍出版社、一九九二年)を参照。
- (6) 柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』(書目文獻出版社、一九八二年) 参照。
- (7) 上田論文は、孫楷第の説を紹介したあと、馬力氏はそこから更に考察を進め、と言いが、馬力はイデマの説に基づき、『南宋』の意味を解釈している。
- (8) たとえば注(2)前掲大塚書二二三頁に、『南宋志小飛龍伝』の名が見える。
- (9) 『飛龍全伝』は、『南宋志伝』に基づかないというイデマの主張が、少なくとも『飛龍全伝』後半四分の一について成り立たないことは、注(4)前掲論文、また本文前掲上田論文参照。
- (10) 注(9)に同じ。
- (11) 『筆記小説大観』(江蘇広陵古籍刻印社、一九八四年)所収本による。著者の見聞を綴った内容で、巻三には乾隆壬子(一七九二)の自序もある。
- (12) 氏岡真士「李玉の伝奇と明清小説—『風雲会』の周辺—」(信州大学『人文科学論集』人文文化コミュニケーション学編)第三十三号、一九九九年) 参照。
- (13) たとえば『三国平話』で張飛は劉備とはぐれ、古城に籠もって『無姓大王』を名乗り、『快活』なる年号を定めた(巻中)。なお笠井直美「『二宗各叙宗祖』—元明の三国故事の通俗文芸における君臣秩序に関わる叙述—」(名古屋大学『言語文化論集』第XIX巻第2号、一九九八年) 参照。
- (14) 鄭恩は、『南宋志伝』第十三回では、『鄭州人氏』、また羅貫中『宋太祖龍虎風雲会』第一折では、『大梁人氏』とされ、本来は河南の人と設定されていたらしい。汝南も、鄭州や大梁とは離れるが、河南の地である。
- (15) 『明清善本小説叢刊』所収の影印本。ただし封面を欠く。現物は内閣文庫に蔵され、実見した。
- (16) 『明清善本小説叢刊』所収の影印本。ただし、封面と『北宋』部分を欠く。現物は宮内庁書陵部に蔵され、未見。
- (17) 『北宋志伝』に関する最近の論文としては小松謙「武人のための文学—楊家将物語考—」(『阿頼耶順宏・伊原沢周両先生退休記念論集』アジアの歴史と文化)汲古書院、一九九七年)、また上田望「講史小説と歴史書(3)—『北宋志伝』、楊家将演義』の成書過程と構造—」(『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第3輯、一九九九年)がある。
- (18) 他にもあるが、恐らく葉真池刊本の系統であり、考察の対象から外しても影響あるまい。注(2)前掲大塚書参照。たとえば致和堂刊本『新鵝眉公批点按鑑參補出像南宋志伝』は、『北宋志伝』とセットであり、大塚書は、『北宋志伝』の序は戊午中秋日□□人題とする……万曆戊午序から万曆の文字を削ったにすぎない」と指摘する。万曆戊午(一六一八)とは葉真池刊本の序に記された年である。
- (19) 原文は、『益俾好事者為之訂校』。俾は裨に通じ使役ではない。世徳堂刊本『南宋志伝』の序が出版事情を記した後、以て好事の者の為に譚を佐く」と結ぶのも参照。
- (20) 太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四年)、磯部彰『西遊記』形成史の研究』(創文社、一九九三年) 参照。『南宋志伝』についても、既に言及されている。太田書は、世徳堂刊本『唐書志伝』に、姑孰陳氏尺蠖齋評釈、南京の周氏大業堂刊本『東西晉演義』に、秣陵陳氏尺蠖齋評釈」とあることも指摘している。
- (21) 大木康『山人陳繼儒とその出版活動』(山根幸夫教授退休記念現代史論叢)、汲古書院、一九九〇年) 参照。
- (22) 『古本小説叢刊』第五輯。

- (23) 『古本小説叢刊』第四輯。
- (24) 『古本小説叢刊』第三十七輯。
- (25) 『古本小説叢刊』第六輯。
- (26) 大塚秀高「嘉靖定本から万曆新本へ」(『東洋文化研究所紀要』第百二十四冊、一九九四年)参照。なお大塚氏の「列國志」版本に対する見解は、「三統研究前後」(『中国古典小説研究』第四号、一九九八年)にも示されている。
- (27) 本文前掲大塚論文、また小松謙「西漢をめぐる講史小説の系統について—劉秀伝説考補論—」(『未名』第十号、一九九二年)参照。
- (28) たとえば丸山浩明「余象斗本考略」(『松学舎大学』人文論叢』第五十輯、一九九三年)参照。
- (29) 『重刻京本通俗演義按鑑三國志伝』、『鼎鵠京本全像西遊記』、『新刻増補批評全像西遊記』、また『新刻全像二十四尊得道羅漢伝』。
- (30) 中川論「三國志演義」版本の研究」(汲古書院、一九九八年)、磯部彰「西遊記」受容史の研究」(多賀出版、一九九五年)、また注(27)前掲小松論文など参照。
- (31) 『新刊通俗演義三國志史伝』。井上泰山編「三國志通俗演義史伝(上)・(下)」(関西大学出版部、一九九七・一九九八年)、また注(30)前掲中川書参照。
- (32) 『京本全像挿増田虎王慶忠義水滸全伝』ほか。馬幼垣「水滸論衡」(聯経出版事業公司、一九九二年)参照。
- (33) 『音釈補遺按鑑演義全像批評三國志伝』、『新刊京本校正演義全像三國志伝評林』。注(30)前掲中川書参照。
- (34) 白木直也「巴黎本水滸全伝の研究」(著者自印、一九六五年)、また注(32)前掲馬書参照。
- (35) 本文前掲上田論文に、誰の名で詩が挿入されているかの統計がある。ただし厳密には若干の補正が必要であろう。なお注(17)前掲上田論文の「北宋志伝」についての統計も、たとえば巻十九の静軒詩が漏れており、同じことが言える。
- (36) 金文京ほか「花関索伝の研究」(汲古書院、一九八九年)参照。
- (37) 森瀬寿三「唐詩新攷」(関西大学出版部、一九九八年)参照。
- (38) 石昌渝「朝鮮古銅活字本〈精忠録〉与嘉靖本(大宋中興通俗演義)」(東北大学「東北アジア研究」第2号、一九九八年)参照。
- (39) 注(2)前掲「中国通俗小説総目提要」、また注(26)前掲大塚論文参照。

The myth of Prince of Nan-Song (南宋)

UJIOKA Masashi

The Nan-Song Zhi-zhuan (南宋志伝) is a novel on the founding of the Bei-Song (北宋) dynasty. This title has puzzled us. Many scholars believe that “Nan-Song” is an abbreviation of “Prince of Nan-Song”, because the Fei-long Quan-zhuan (飛龍全伝) tells that Zhao Kuang-Yin (趙匡胤) was Prince of Nan-Song and founded the Bei-Song dynasty later. They say the Fei-long Quan-zhuan is based on the same early ping-hua (平話) that went into the making of the Nan-Song Zhi-zhuan.

The author does not share this view. There are two reasons. One is that the Fei-long Quan-zhuan is based on the Nan-Song Zhi-zhuan, and neither historical work, novel nor drama before the Fei-long Quan-zhuan says Zhao Kuang-yin was Prince of Nan-Song. Another reason is that the title in the old text is not the Nan-Song Zhi-zhuan but the Nan-Bei-Song Zhuan (南北宋伝).

This title is a kind of sensational advertisement, such as the Quan-Han Zhi-zhuan (全漢志伝) and the Tang-shu Zhi-zhuan (唐書志伝), though it also contains a part we now regard as the Bei-Song Zhi-zhuan (北宋志伝) or the story of the Yang family (楊家將). Afterwards, the first half was called the Nan-Song Zhi-zhuan, and the second half was called the Bei-Song Zhi-zhuan. The myth of Prince of Nan-Song was originated here.